

「する」は動詞か？ —意味と機能の導入順序—

リュブリャーナ大学
重盛千香子

0. はじめに

日本語初級文法の導入は、いろいろな動機や目的で日本語を第二言語として学ぶ人達の日本語の基礎知識となる大切な部分である。教師の立場としては、それぞれの文法事項をできるだけ明快に整理し、特有な文法現象に注意して、各々の意味・用法における誤用を防ぎ、学習における周り道を避ける工夫をしたい。本稿では、「する」を例にとり、特に広範囲の意味や機能を担う基本語彙が、日本語の文章のなかでどのような働きをしているかを考えながら、それらの意味や機能が学習を進める中でどのように提示されているかを見る。この過程は、学習者のレベルに応じてどのような辞書や参考書の使用を勧めればよいか、という問題とも関わってくるので、いくつかの参考図書で「する」がどのように扱われているかを見る。

1. 動詞の定義

「する」は、品詞分類によれば、もちろん動詞に属する語である。日本語では、動詞は次のように定義される。

基本的な品詞のひとつ。活用のある自立語（用言）。用言のなかでは、形容詞・形容動詞が事物の性質・状態について叙述するのに対して、動詞は事物、物的、心的事象の作用・変化について叙述するのを主要な役目とする。（『日本語教育事典』1982 大修館、118 頁）

活用があり、事物または事象の作用・変化を表わすというのが動詞の大きな特徴であるわけだが、「する」という語の場合、このような典型的な動詞として使われる場合もあれば、動詞としての特徴を必ずしも完全に発揮せずに単なる機能語として使われる場合もある。

2. 「する」に関連した初級の学習項目（1～2年生）

リュブリャーナ大学日本研究の現代日本語の授業（入学時に予備知識の無い学生を対象とする）では、今までに日本国内で作成された日本語教育初級用教科書に準じた導入順で文法事項を紹介している。「する」という語に関連する文法項目は、次のような順番（下記ア. からソ.）で登場する。以下、「する」が関係しているそれぞれの文型を代表的語彙とともに示し、その指導注意点などの説明を加えながら、初級（1年生から2年前半）の学習過程を概観する。

ア. 勉強（を）する [～します。～しました。～しています。]

（せんたく、そうじ、さんぽ、練習…）

イ. テニスをする [～します。～しました。～しています。]

（ピンポン、スキー、ゴルフ、ゲーム、試合…）

まず、「する」は「勉強」、「さんぽ」など、活動の種類を表わすいろいろな名詞（勉強、そうじ、など）に伴ってそれを動詞として使う場合に現われ（上記ア.）、この場合、名詞は他動詞としての「する」の目的語として助詞「を」を伴ってもよいし、「を」なしで使われることもある。日本語教育の最初の部分で導入されるので、その時期にはおもにマスの非過去形、過去形、そしてテイル形（上記 [] 内）で紹介される。その次の用法としてあげたイ. の場合は、スポーツの種類を表す名詞（テニス、スキー、など）に伴い、ア. とほとんど同じように使われるが、この場合は名詞が必ず助詞「を」を伴ってスポーツの種類を述べる。

ウ. 何をしますか。（勉強します。） [～しましたか。～していますか。]

どうしましたか。（かぜをひきました。）

…とき、どうしますか。

…とき、どうしたらいいですか。

どうしたんですか。

ア.、イ. と同時期に、「する」は、活動の種類をたずねる質問文において「何を」を伴ってあらゆる動詞の代表として使うよう導入され（「何をしますか。」）、さらに、状態の担い手に関する質問文では状態の種類（上記では「かぜをひく」）をたずねるために「どう」という疑問詞と組み合わせて現れる（「どうしましたか。」）。この場合は、結果としての状態を訊いているので、「する」は必ずタ形（過去形）である。質問文の「する」は、「雨がふったとき、どうしますか。」のように、シチュエーションが限定されたときの活動の種類を訊いたり、タラという仮定形でシチュエーションが限定されたときの行動についての相手の提案を求めたりする用法（「こんなとき、どうしたらいいですか。」）でも導入される。また、少し学習が進んで、名詞化の「の（ん）」が特に口語で説明的機能を担うことが導入されると、状態の担い手に関して、「どうしたんですか。」と訊けるようになる。本稿では、これら質問文の「する」をすべてウ. として上にまとめたが、質問文の「する」が、「何をしますか。」「どうしますか。」のようにあらゆる動詞の代表として答えにも動詞を要求する場合と、「どうしましたか。」「どうしたんですか。」のように形容詞的表現を要求する場合とがある。後者の場合は答えに、「頭がいたいです／いたいんです。」と、状態を表す形容詞が登場することもあり、この用法では、動詞「する」はほかの活用形は使うことが無い（*どうしますか。*どうしていますか。）わけで、本来の動詞としての特徴を完全には持ち合わせないことになる。

エ. 短くする／短くなる

きれいにする／きれいになる

さらに学習が進むと、エ. に示すように、状態を表すいろいろな形容詞の副詞形（イ形容詞の〜ク、ナ形容詞の〜ニ）に伴って、動詞「なる」と対立する他動詞として紹介される。自動詞の自発的変化の表現に対して、「する」は意思を伴う他動行為表現に使われる。

オ. お願いします。お持ちします。

そして、1年生の後半では、いろいろな敬語表現を学習する中で、謙譲語の文型としてオ. に示す言い方を導入する。ここでは、「する」は接頭辞「お／ご」とセットになってへりくだりの意味を表し、ル形、タ形、テイル形を保持しているとはいえ、行為の種類を表す語彙的部分はそれぞれの動詞（上記例文の場合、「願う」、「持つ」）に譲り、やはり一種の機能語として使われる。

カ. 無理（を）する、努力（を）する

キ. ゆっくりする（休みをとってゆっくりする）

ク. ほっとする、びっくりする

1年生後半から2年生に入る頃には、副詞的表現の幅も広がり、統語的にはア. で見た〔名詞＋（を）＋する〕と同型だが、意味的には行為の側面を表す副詞的意味を持つ用法（カ.）、副詞に伴って主体の一時的特性を表す用法（キ.）、そして主体の瞬間的変化を表すク. のような用法も登場する。これらの用法では、「する」はエ.（短くする、きれいにする）で見たような他動詞的機能は持たない。「する」を含むカ.、キ.、ク. の連語は、どれも行為または状態の担い手の特徴を表し、必ずしもその積極的意思が表現されるとは限らない。

ケ. ～ことにする（日本へ行くことにします。）

コ. コーヒーにする（会場はどこにしましょうか。）

「決める」という意思決定の意味を持つ文末表現として〔名詞＋に＋する〕という文型が導入されるのも1年生の終わりから2年生の始めの頃である。ケ. のように任意の動詞の辞書形（ル形）と形式名詞コトで行為の種類を表し、「にする」がその行為を実行する意思決定を表す用法と、ある種の省略文であるコ. の文型（コーヒーにする。＝コーヒーを飲むことにする。；会場はここにします。＝会場をここに決める。）が同じ頃に紹介される。この「する」にはエ. で見た他動行為表現と同じように、行為主

の意思が強く感じられる。

サ. ~ようとする (出かけようとしたら、電話が鳴った。)

シ. ~ような気がする (味、音、感じ…)

〔動詞 (マス形) +よう+と+する〕の文型で、行為、または状態変化のほんの少し前というアスペクト的表現があることも、2年生の始めごろに導入する。また、シ. に示すように、「気」、「味」、「音」などの感覚を表す名詞を [名詞+が+する] という文型に使う「ある感じを受ける」という意味表現になることも同じ時期に紹介する。この二つのどちらの用法も、「する」は典型的な動詞の意味役割を担うわけではなく、文型全体の中で、サ. は事柄のアスペクトを、シ. は受動的、または自発的な感覚の発生を表している。日本語では形態的にあくまでも動詞であるが、他の言語では副詞や補助動詞で表されたり(〔英〕 almost, tried to)、非人称表現であったり(〔英〕 it feels/tastes like)する、面白い用法である。

ス. どんなかっこうをしていますか/いましたか。(マスクをする、めがねをかける)

セ. さっぱりしている、ほっそりしている

ソ. マスクをした人、ほっそりした女性

ス. は、人物の外見を描写する際、[名詞+を+している] という文型でその描写を促す質問文である。答えは「マスクをしています。」のように、同じく [する] を使う場合や、「着る」、「はく」、「かける」などの動詞を使う場合がある。動作の結果としての状態を表すので、動詞はいつもテイル形を使用する。そして、この人物外見描写 (ス.) と似た文型だが、人物の性格や様子を表す用法として、セ. のように擬態語副詞と「する」のテイル形の用法がある。このような人物描写に使われる2種の [する] (上記のス. とセ.) は、連体修飾句に使われる場合、ソ. で示すように“性状規定的述語の場合のテイルの縮約形”といわれるタ形 (寺村 1984: 197) でも現れる。テイル形の縮約形としてのタ形はどんな連体修飾句にでも現れるわけではない。性状規定的述語としての動詞は、金田一 (1950) の分類の瞬間動詞か第4種の動詞でなければならない。そして、副詞も、程度副詞や陳述副詞が「する」を伴うことは無く (*いつもする人→いつもの人、*かなりする人→かなりの人、*ちっともする人、*もしする人)、状態副詞だけがその状態を表すという意味の特徴から名詞を修飾するときにも使われるのだが、形態的に無理があるために、「する」が機能語としてここに現れると考えられる。(*ほっそり女性、*ほっそりの女性→ほっそりしている女性/ほっそりした女性)

3. 辞書における「する」

上に見てきた「する」のいろいろな用法について、辞典や、通常このレベルの学生が使用している日本語教育参考書が、どのような記述をしているかを次の三資料で調べてみた。

資料1 『日本語大辞典』(1989) 講談社

資料2 『外国人のための基本語用例辞典 (第三版)』(1990) 文化庁

資料3 グループ・ジャマシイ(1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

まず、資料1の辞典では、見出し「する」の説明が大きく㊦サ変自他動詞と㊧補助動詞に分かれ、㊦はさらに①他動詞と②自動詞の用法に分かれていて、それぞれの用法が掲げられている。㊦①には本稿で分類した文法項目のア.、イ.、ウ.、エ.、カ.、㊦②にはケ.、コ.、サ.、シ. が含まれる。②補助動詞としては本稿のオ. があがっている。本稿キ.、ク.、セ.、ソ. の副詞に伴う「する」の記述は、「する」の見出しの下には見当たらないが、例えば「さっぱり」という語の見出しの下に用例として「気分がさっぱりする」「さっぱりした味」が示されているので、このような国語辞典を利用する場合は、機能語としての「する」の用法をそれぞれの副詞の例文から拾うことになる。

これに対して、日本語非母語話者を対象とする資料2は、他動詞的用法 (ア.、イ.、エ.)、自動詞的用法 (シ.) などの後、8番目の用例として“ある名詞や副詞の後について動詞を作る”という説明でア. の一部である「勉強する」、セ. にあたる「にこにこする」などをあげている。ソ. に見た連体修

飾句の中の「する」は、それぞれの副詞の見出し（例えば「さっぱり」）に、「さっぱりとした身なり」、「さっぱりした気持ち」などの用例でその文型を示している。また、資料2よりさらに新しい参考書である資料3では、このような連体修飾用法も、「する」の見出しの記述のひとつとしているのが新しい試みだといえる。（[副詞+する] 赤ちゃんの肌はすべすべしている。なかなかしっかりしたよい青年だ。）「文型辞典」であるから、個々の語彙としての副詞の見出しを設けていないことから、当然、妥当な記述だといえる。

4. おわりに

本稿では、「する」というひとつの動詞に限って、そのいろいろな意味や用法が日本語教育の初級段階でどのように登場するかを見た。一方では、自動詞と対立する他動詞として“作用または変化”の意味を色濃く持つ用法がある反面、ふつうは形容詞や形容動詞に任されている“性質や状態”を表す用法もあり、副詞を用いる表現では、単なる機能語として働いていることを見た。

ダーラム大学での本稿の発表の際、発表後のディスカッションで、「お茶する」など、最近の話し言葉に盛んに使われるようになっている「する」を含む文型への指摘もあった。また、林四郎先生には、山田孝雄の「形式名詞」、または、メタレベル表現としての「する」が“そういう認識をする心の働き”を表すものであり、認定する側からの言い方として「人にして人にあらず」、「なぜかしてこれが気になる」、「冬にしては暖かい」、などの表現法があることもご指摘いただいた。

基本語彙の中には、このように複数の意味や機能を担う語が「する」のほかにもたくさんあるはずである。教師は、このような語には特に注意して、その導入法や導入の時期を考え、辞書や参考書におけるおのおのの語の記述を学習者の立場を思いやりながら確認する必要があるだろう。

参考文献

- 金田一春彦 (1950) 「日本語動詞の一分類」『言語研究 15』(『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房 1976, 5~26.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 丹羽哲也 (2001) 「連体修飾節のテンスとアスペクト」『月刊言語』第 30 卷、第 13 号、大修館、56-62.
- Shigemori Bucar, Chikako (2002) 'Noun-modifying Stative Expressions by Adverbs in Japanese', *Azijske in afriske studije VI, 1, Oddelek za azijske in afriske studije, FF Ljubljana, 76-93.*